

この「広報ひこね」は48,200部作成し、1部当たりの単価は6円(1円未満切り捨て)です。ただし、原稿作成・編集などにかかる職員の人件費は含まれていません。

連載企画 | わたしの町の戦国 第3回 |
高宮氏と高宮城

高宮の地を領した高宮氏には2系統がありました。1系統は鎌倉時代末に当地へ地頭として入った、紀州櫛野氏を祖とする高宮氏です。もう一つの系統は、江南の六角氏頼の三男信高を祖とする高宮氏です。

前者を北殿の高宮氏、後者を南殿の高宮氏と呼んでいます。南殿の信高が当地に入ると、北殿の高宮氏は勢力を奪われて、しだいに弱体化していきました。この高宮氏が代々居城としたのが高宮城でした。高宮城は典型的な平地城館で、現在の高宮小学校や高宮幼稚園一帯が城館跡と想定されています。

戦国時代になると、近江は江北の京極氏、のちにはその被官(家臣)であった浅井氏勢力と、江南の六角氏勢力との争いが激化します。

両勢力の境目に位置する坂田郡・犬上郡・愛知郡一帯の土豪(土着の豪族)たちは、一族の存亡をかけて争いに巻き込まれていくこととなります。高宮氏も例外ではありませんでした。

高宮氏は、その当初は六角氏と行動をとりにしたようですが、やがて京極氏、そして浅井氏に加担するようになります。

永禄10年(1567)、織田信長の近江侵攻は、これまでの近江の情勢を一変させることになりました。信長は、近江侵攻に先立って浅井長政と同盟関係を結んでいました。したがって長政配下の高宮氏も同様の関係にあり、永禄11年、信長は上洛(京都に上ること)に際して高宮城に陣取り、ここで長政と会見に及んでいます。

ところが元亀元年(1570)、長政と信長の同盟関係は突如として長政により破棄され、両者は姉川で激突しました。姉川合戦後、浅井勢は北の小谷城と南の佐和山城に分かれて敗走しました。

佐和山城では、およそ8か月にわたる籠城戦が開かれましたが、籠城衆の中に高宮氏の名は確認できません。

実は高宮氏は早くから石山本願寺に帰依し交流を重ねていました。元亀元年、石山本願寺が諸

国の宗徒に激して拳兵し信長と争った際、高宮氏は近江を離れて石山本願寺にいたのです。佐和山城戦の終結後、信長は近江の制圧に力を注ぎ、湖東一帯の反目勢力の一掃を図ります。この時、佐和山城に呼び出された高宮石京亮は、石山本願寺への加担を理由に謀殺されています。

天正元年(1573)、信長は小谷城を攻めて宿願であった浅井一族を根絶します。この戦いでは高宮氏も大きな犠牲を払い、浅井氏と命運をともにすることにしました。高宮宗光が小谷城で戦死。その子宗久は小谷城を脱出して高宮城に帰り、城に火を放って一族離散したのでした。高宮城と隣接する高宮寺は炎上し、灰燼に帰したと伝えられています。

このような歴史をたどった高宮城ですが、高宮城については、これま

でに4次の発掘調査を実施してきました。全容の解明には至っていませんが、土塁や堀、城館を構成する建物跡などが少しずつ明らかになってきています。
問い合わせ先 園教育委員会
文化財課 ☎26-5833番、FAX 26-5899番

◀高宮城跡の発掘調査(5月)

